

部会活動の紹介
(私たちが考えたSDGsとは?)
3回のワークショップで視えてきたこと

インフラマネジメント部会

第1日目 6月21日 ワークショップ状況

JFMA関係者の高感度層の認知度はかなり高く、
取り組みに対しても積極的である
まずは、ブレインストーミングで発散から収束に
言いつばなしではなく、それぞれ付箋にメモして
説明する この作業が貴重

A班

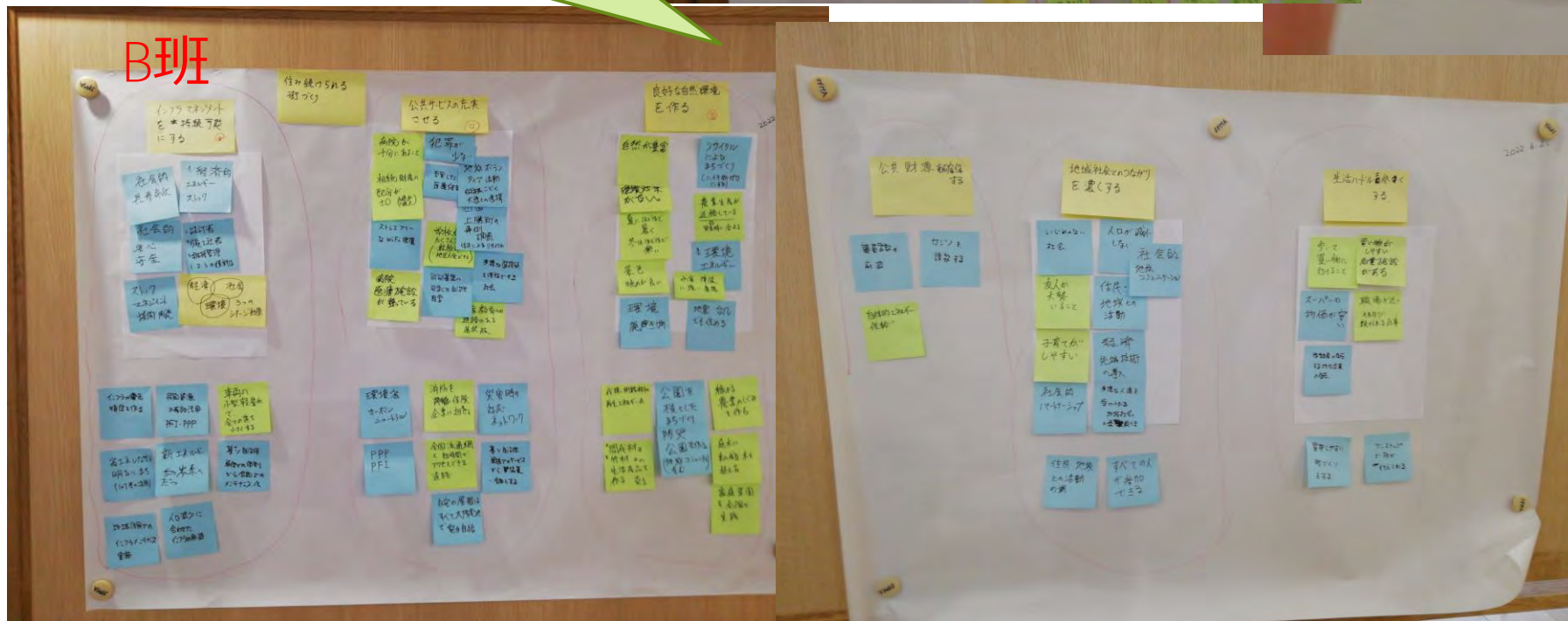
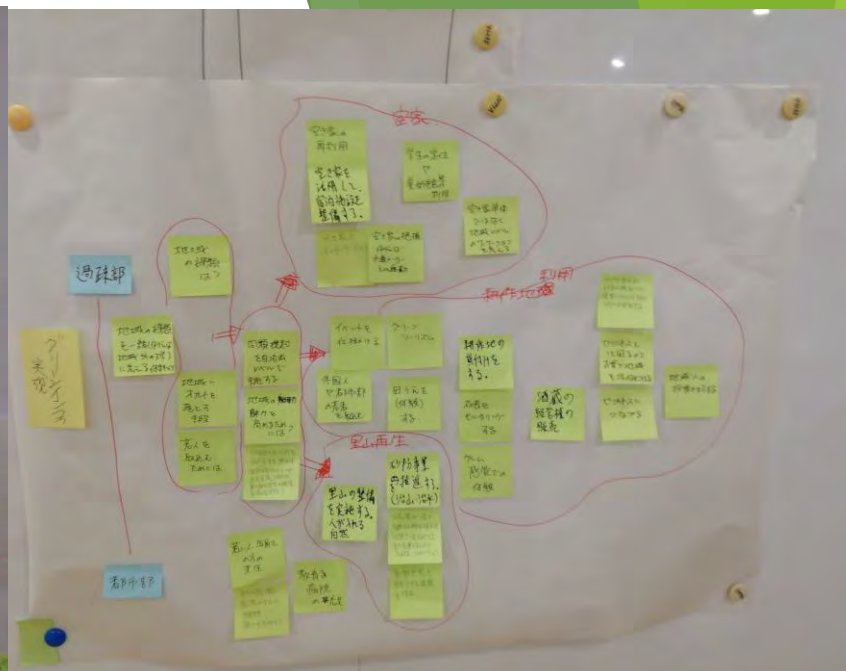
B班

出席メンバー：中川会長、岩佐副会長、安蘇氏、宮島氏、盛田氏、佐々木氏、
岩本氏、鈴木、事務局：川村氏、佐藤氏

躍動感あ
るワン
シヨット

第1日目 ワークショップ WSシート

このように、SDGs + グリーンインフラの全体像を自分の言葉で機能体系図に表現し、参加者全員が共有した



第2日目 7月27日 ワークショップ状況

前回の機能体系図で振り返り、新メンバーに説明し、整備共有するが深堀するほど、ターゲットは、ターゲットはとジレンマを感じてくる



物事は、ばらつきと繋がりが常である

出席メンバー：佐々木氏、山本氏、岩本氏、安蘇氏、多和田氏、幸野氏、渡邊氏、鈴木、事務局：川村氏、佐藤氏

もう一つの大事なSDG s 研究活動の目的と成功基準の共有した (部会として、個人として、これだと思ふところを上げた)

ODSCで再度目標を確認
してみると

目的 Objective

例えば：
聞かないと損をするJFMA流SDG
sプロジェクトを提案する

インフラマネージャーが
どのように関わって行くか
マインドを進化させる

担い手と技術を
どう伝えるか手
段を考える

次世代の人たち（学
生たち）に自慢でき
る成果物を作る

建築物とインフ
ラの関係を理解
する

グリーンインフ
ラとは、何かを
知る（理解が必
要）

成功基準 Success Criteria



マスコミに取り上げら
れる。JFMAに (TV)
問い合わせがくる

インフラマネージャー
の指導のもと
住民が積極的にメンテ
ナンスに参加している

「目的を深堀し、充実させ、
方向性をブレないようにする」

それには、何が必要
かアイデアを
創出する

第3日目ワークショップSTEP3

(ターゲット決めと今後の活動) 8月3日

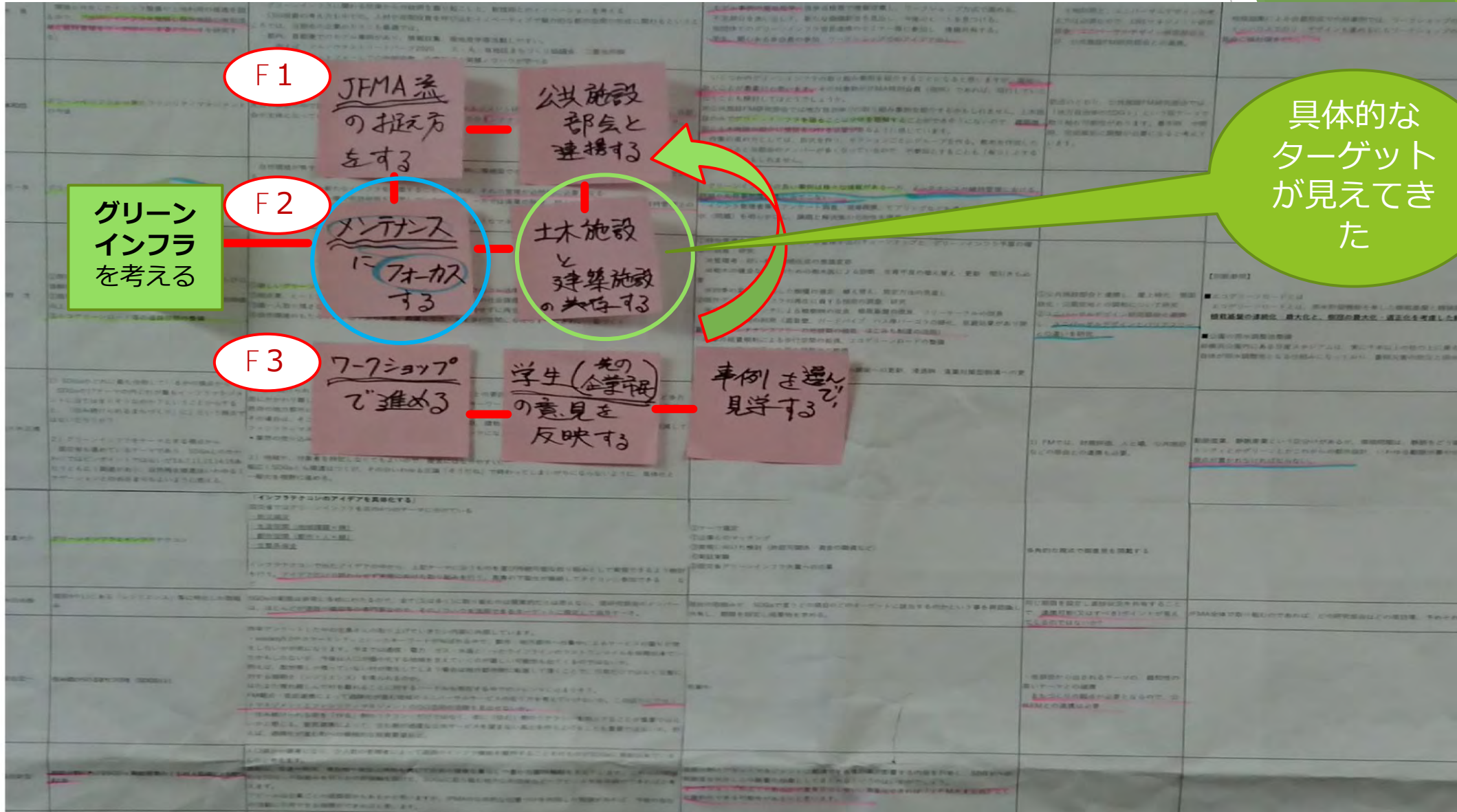
事前アンケートからターゲットに向けて
ヒントを探る

そこで登場する、皆さんが提出した事前アンケートを整理すると共有するターゲットが見えて来た

- ①他と違うJFMA流のグリーンインフラの見方
- ②表に出てないメンテナンスの在り方にフォーカス
- ③やはりワークショップ手法でインハウスも現地も

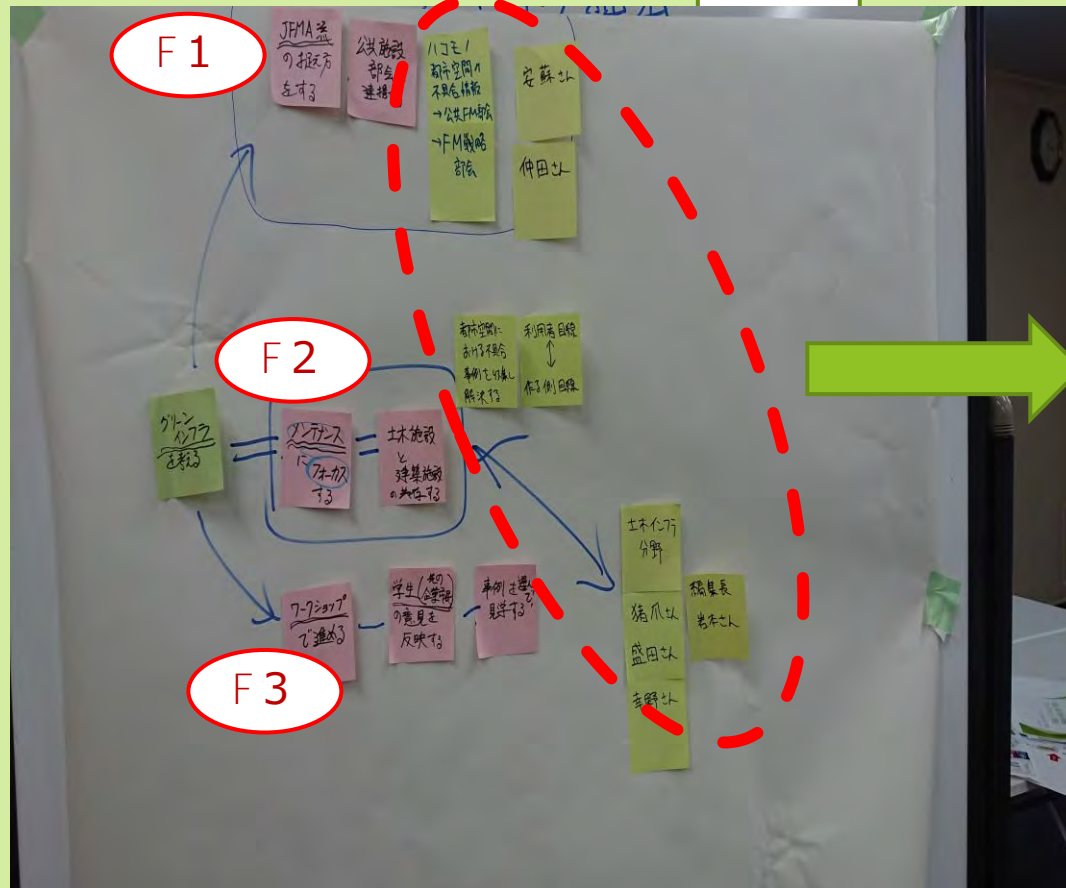
	<p>その主体となっているインフラテクノロジーやグリーンインフラのメンテナンス面を強調することが良いと思います。</p>	<p>設のみでグリーンインフラを語ることは全体を理解する設と土木施設の紹介に強弱をつける必要があるように感作業の進め方としては、目次を作り、セクションごと時と比べると当部会のメンバーが多くなっているの、ことがよいかもかもしれません。</p>
<p>の構築とメンテナンス</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自然環境が有する機能をインフラに取り込んで様々な、特に環境面での課題を解決する取り組みが既に進められている。 ・一方で、なんらか新たなインフラを構築することになれば、その管理が必然的に必要となる ・道路では、緑化の一環で街路樹等を配置しているものの、一方では落葉の除草、根上り、毛虫対策など、維持管理上の課題も多い ・では、グリーンインフラを導入・構築する段階から、どのようなマネジメントを実施すべきなのか？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・グリーンインフラの良い事例は様々な情報がある一問題や失敗事例等は表に出てこない ・インフラ管理者等にアンケート調査、現場視察、ヒト状（問題）を明らかにし、課題と解決策の方向性を
<p>ラの予防保全措置の強化ならびに ラの再生、機能向上、付加価値 ド等の道路空間の整備</p>	<ul style="list-style-type: none"> ①新しいグリーンインフラを作るのではなく、既存のストックをフル活用する ②脱炭素、ヒートアイランド現象、豪雨災害（雨水処理能力）の社会課題を解決する ③誰一人取り残さないために、既存グリーンインフラを統廃合せずに再生し、有効活用する ④自然環境のもたらす潤い感や安らぎ感、綺麗な空気・水を歩行空間にもたらす→にぎわい・街づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ①緑地管理を効率化、高度化する管理手法のチュー保の調査・研究 <ul style="list-style-type: none"> ※管理者・担い手・地域住民の意識変容 ※樹木の健全な生長のための樹木医による診断、要 ※四季の変化に対応した樹種の選定・植え替え、 ②既存グリーンインフラの再生に資する技術の調 <ul style="list-style-type: none"> ※グリーントレンチによる植樹樹の改良、植栽 ※空いた空間の利用（遮音壁、ガードパイプ、 ※草不要なメンテナンスフリーの地被類の植栽、 ※車の総量規制による歩行空間の拡張、エコク ※既存公園を利用した雨水調整池の整備 ③保水力アップのための技術の調査・研究 <ul style="list-style-type: none"> ※保水性舗装・遮熱性舗装、透水性タイル舗新
<p>も合致しているかの視点から の内どれが最もインフラマネジメ うなのか？ということからする るまちづくり」という視点で ラをテーマとする視点から るテーマであり、SDGsとのかか トではないが3.6.7.11.13.14.15あ あり、自然再生推進法いわゆるミ</p>	<p>1) 住み続けられるということは、住み続けられないということの要因を除くことでもあるが、社会的、経済的など多方面にかかわり難しい。スマートシティや田園都市国家などのキーワードで構築するものもありとは思いますが、一番の問題は既存の地方都市における「住み続けられる」ことへの提言であろう。 その場合は、そこで持っているすべてのアセット（土地、財政、建物、道路、など）をどう組み合わせ、または削減してファシリティマネジメントにつなげるかという制度を含めテーマになるのではないかと *業界の売り込みと勘違いされる危険がある</p> <p>2) 地域や、対象者を特定しなくてもよいので、提言にはなりやすい。 幅広くSDGsとも関連はつくが、その分いわゆる正論「そうだね」で終わってしまいがちにならないように、具体化と、一般化を視野に進める。</p>	

例えば：皆さんのアンケートから整理して シンプルに機能システムで表現してみたら



さて、どうする。相互理解から合意形成に向けて

A班



B班

- 1, 身近なグリーンインフラから住みやすいまちづくりにつなげる
- 2, グリーンインフラ建設の好事例は多いがメンテナンスを深掘りしたものが見かけない
3. そこでJFMA流の土木、建築の共存での都市空間事例での持続可能なメンテナンスを追求してみる。
- 4, 土木・建築のそれぞれのメンテナンス実務実績者が、まずは、共創してみる
- 5, 活動の中で各部門の垣根を越えて協働・共創 (産官学民)

良い事例はたくさんあるが、（貯留層、透水性舗装、グリーン化） 持続可能なメンテナンスとみると不都合が見えてくる

歩道の透水性と、植樹ます



側溝・保水性舗装から入った雨水は、雨水貯留浸透基盤により地表までしみ上がり、蒸発散作用により気温の低減効果が発揮

従来の公園整備
雨水浸透に配慮した公園整備

側溝へ排水
地下へ浸透
砕石

雨水浸透や緑陰形成等に配慮した公園整備

地域主体の民有地緑化・レインガーデン整備

地域コミュニティの形成

目標

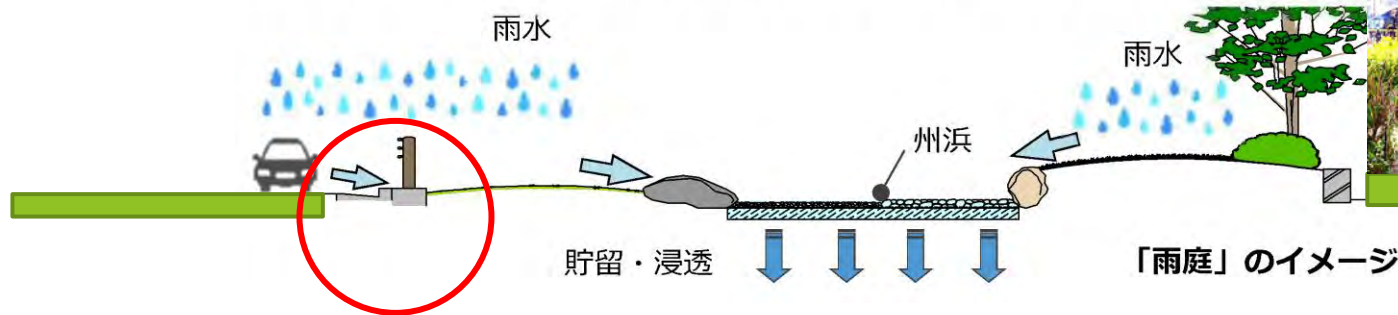
- 下水道施設への負荷軽減に資する公園緑地等の整備面積の増加
- 多様な主体の参画によるグリーンインフラの創出・育成
- グリーンインフラの創出・育成による微気象の緩和

都市空間としてグリーンインフラを考えると建物・不動産・道路空間
共存の中で点と面を繋げてメンテナンスをデザインする考え方を身に着ける
これってJFMA流じゃないですか？

例えばこの図は、シンプルで一番わかりやすいですね。



地上に降った雨水を、下水道に直接放流することなく一時的に貯留し、ゆっくり地中に浸透させる構造を持った植栽空間であり、修景・緑化に加え、雨水流出抑制、水質浄化、ヒートアイランド現象の緩和などの効果が期待される



建物・不動産・道路空間
共存の中で

快適な
歩道空間とは？

建物
カフェレスト
ラン

現地を見て、その機能は何のため。見方でいろいろ発見する。

SDGsで変わるファシリティマネジメント (タスクフォースレポート) と整合性を確認し、今後の活動に活かす

- ▶ SDGs導入に一律の「答え」はない。説得力あるストーリーを、各企業・団体が「自分の頭で考えることが必要」
- ▶ SDGs等に取り組むには、一社で未来を描くのではなく、産官学民の「共創」が不可欠。そのためも共通言語づくりや目的共有などのプロセスづくりが重要となる。
- ▶ 目的を設定し、関係者と共有し、共感を引き出すことが不可欠。
- ▶ これまでの延長線上にないイノベーションを試行していくための仲間づくりも必要である。多種多様な背景を持つ人たちが集まる場で、ビジョンを共創していくことも有効である。
- ▶ バックキャストिंगで、どんなパートナーとの協働が必要かを考えていく。組織や業界を越えた未来志向の場で、ありたい姿を共創していく。
- ▶ 新しい価値観を探索することを目的とし、専門分野の異なる8人で2グループに分かれて2日間のワークショップ形式で実施した。コロナの影響もあり短時間での実施となったが、グループ間に対話しながら、多視点からいくつかのキーワードを抽出した。
- ▶ ここで共通するキーワード ①道路、公共施設を実験場所として活用し持続可能なメンテナンスのリ・デザイン
②学校がハブになり協働ワークショップの実践 ③社会貢献をしようというモチベーションではなく、普段の意識・行動で参加していく。例えば：現地を散策して見えてくるもの。④市民マインドを醸成する。
- ▶ 企業が社会課題にイノベーションに取組例 ドミノピザが道路補修を（米国で話題に）
民間企業が道路や学校など公共にかかわる。
- ▶ 静岡市SDGsウィーク 場・活性化ソフトの力

インフラマネジメント部会のこのワークショップのプロセスは、タスクフォースレポート2021で推進している「未来洞察ワークショップ」SDGs実践のための共創の一環を担っている。